

E・E・ネマーズの『ホブ
ソンと過少消費』の若干の
問題について

清水 嘉治

本書はJ・A・ホブソンの經濟學の核心を示す過少消費説を、彼の全著作體系の中で把握することを試みた一研究である。

これまでは、ホブソンの過少消費の論理を全著作の中で系譜的にあとづけた研究書は殆んど見當らなかつたといつてもよいであろう、もちろんこれまでのホブソン研究については經濟學史上過少消費論者として、厚生經濟學者として、また社會思想家として、とくに帝國主義的科學的研究の先驅者として、それぞれの立場から評價がなされてきた。だがその場合でも、ホブソンの主要著作から検討した一面的な評價であつた。この點ネマーズの場合はホブソンの全著作に當つて、經濟學史上過少消費論者として把握しているのである。その視角は、あくまでも近代經濟學者としての視角である。本書の序文でM・ブロンフ

エンブレナー教授もいっているように、經濟學說の形式上の歴史は、「おそらく社會主義經濟學說を除いて經濟學の裏側の歴史を取扱うことを輕視してきた。」この點の反省からネマーズは、オーストリア學派、マーシャル經濟學、ケインズ經濟學およびアメリカの制度學派を正しく研究する中で、その折衷主義的利點から、ホブソンの廣い思想系列をたどろうとしたのである。

かかる視點からまず過少消費説を展開した顯著な先驅者たちであるシスモンディ、ローダーデール、マルサス、ロードベルトウスおよびマルクスとホブソンを比較し、ホブソンが彼らの誰の弟子でもないことおよびとくに經濟學史上ホブソンを過少消費論者に位置づけようとするのである。

つぎにネマーズはホブソンの經濟學の活動分野を四つの時期にわけて精緻に分析し、それぞれの特徴を指摘する。この點礫部氏が詳細に紹介しているので、本稿では簡單な論評にとどめる。さらにネマーズはホブソンが經濟學で活躍した分野は、(1)過少消費論、(2)帝國主義論、(3)租稅理論の三分野であり、(4)の厚生經濟學の分野は、まえの三分野と論理的必然性をともないし、哲學の分野に屬するとみなすのである。

つまり彼はホブソンの經濟學の三分野の基盤が過少消費論にもとづいて展開されていることをきわめて克明に描きだし、そしてホブソン分析の鍵が剩餘の概念にあることを論證し、同時にホブソン過少消費論批判を展開するのである。彼のかかる分析の背景が、終始一貫してホブソンを近代經濟學の先驅者とし

ての過少消費論者に性格づけるのである。したがってこの點方法論的限界をまぬかれない面を残しているといえよう。つまりホブソン評價を近代經濟學史上過少消費論者としてのみ限定してしまうことは彼の全體像を見失う缺陷を残ざるをえないからである。たとえ本書の直接の研究對象が、ホブソンの過少消費論の解明にあつたとしても、彼自身の帝國主義の科學的研究の先驅者としての問題意識、社會思想家、ヒューマニストとしてのホブソン評價を完全に素通りするわけにはいかないであろう。にも拘らず經濟思想、社會思想史的側面を素通りしているところに本書の最大の特徴があるのかもしれない。ともあれ本稿では、(一)ネマーズのいう經濟學史上過少消費論を展開した五人の經濟學者とホブソンとの問題、(二)四つの時期區分の性格上の問題、(三)帝國主義論評價の問題の三點に限定して紹介し、論評することにする。なお念のため本書全體の構成を示すと、次のようになつてゐる。

- 第一章 「實質的」諸要素の因果的役割を強調する初期の過少消費論者たち
- 第二章 ホブソンの生涯と經濟思想に與えた影響
- 第三章 ホブソンの最初の過少消費論
- 第四章 過少消費論の一適用としての帝國主義論
- 第五章 剩餘の概念——ホブソン分析の鍵
- 第六章 ホブソン過少消費論批判
- 第七章 租稅と支出政策
- 第八章 合理化、賃金およびその他の諸政策

二

ネマーズはかかる構成を展開するにあたって、序論において従来過少消費論をめぐる議論に二通りあることを紹介する。すなわちリアル・タームによる過少消費説の展開と、マナー・タームによる過少消費説の展開をあげ、前者がホブソンで、後者の場合がケインズであるという。ホブソンの場合は、「一般理論」の中で「經濟思想に一時代を劃したものと評價して始めて意義づけられたというのである。そして前述したようにホブソンの經濟學への主な貢献は四つある」と説明する。すなわち、(一) 過少消費論 (一・三・六章)、(二) 帝國主義論 (四章)、(三) 租稅論 (七章)、(四) 厚生經濟學であり、ここで第四の厚生經濟學の側面を除外する、かかる意圖のもとに第一章以下が展開されるわけである。

ここではまず第一の問題として經濟學史上過少消費論を唱えた先驅者である J・シモンディ、(1773~1842)、L・ローダー・ディール (1759~1839)、T・R・マルサス (1766~1834)、J・C・ロードベルトゥス (1805~1875)、K・マルクス (1818~1883) の五人を取り上げ、それぞれの過少消費説とホブソンのそれとを比較している面を検討してみる。ネマーズはこれら五人の經濟學者の「過少消費説」を餘りにも簡単に素描する。すなわちシモンディは過少消費を恐慌の原因の説明に求めるとのべ、シモンディは所得分配の重要なものとして労働者の相對的分け前を考えるのではなく、むしろ不充分的なものとして

の労働者の絶対分量を考えるのだという。シモンディの體系では、生産の諸形態にみられる誤った生産は所得の悪分配と關係しているのである。つまり彼の體系では消費を決定するものが所得であり、これを中心に人口と所得との關係、生産と所得との關係がつかまえられるのである。したがってネマーズは、シモンディはもともと經濟學者でなく、歴史家であるから小生産者の社會では分配の正義、厚生がおこなわれるという、この點から資本主義への倫理的批判をしたが、これは原理的には分配論にもとづくものであると要約する。

ローダーディールにあつては、シモンディ、ロードベルトゥス、ホブソン等と同じ意味での過少消費論者でないことが特徴的であること、にも拘らず彼をスミスの投資、貯蓄理論の批判者としてとりあげ、彼は消費不足、生産にむけられる資本、過剰生産に導くものとして競争を批判せず、とくに技術とか資金需要を問題にし、この限りで過少消費を取上げたのである。したがって當時のイギリスの負債、回收の理論構造に注意をむけ、過剰生産恐慌を否定した。この點ネマーズは通俗的解釋をでいていないのである。

マルサスにあつては、ナポレオン戦争後のイギリスの過剰生産の可能性をみると、それを防ぐために地主階級の不生産的消費が必要であることをとき、その限りでマルサスの過少消費を取りあげ、さらにネマーズはマルサスの政策の取柄がサービス産業の發展や所得の平等化(地主と公債所有者の流布による)、消費財の種類を増して、國內外の産業の擴張、不生産的消費の

獎勵などをした點を整理している。

ロードベルトゥスにあっては、ローダーディール、マルサスの過少消費説よりもむしろシスモンディの系譜につながつていふことをあげ、彼によると過剰生産、恐慌の原因は労働者の所得が少ないからでもなく、また資本家の消費力が有限であるからでもなく、労働者の所得が労働生産性の増進に伴い生産物價のうち僅少になるから賃金部分が、剰剰生産物部分に比してますます減少すること、したがって國家の力で過少消費を抑制するという考えを抽象的に説明する。

さいごにマルクスにあっては、ネマーズによれば彼の過少消費論は労働價值論の一構成部分でありホブソンと同じく一經濟學者以上の仕事をしたとのべ、さらにネマーズは、マルクスの恐慌論は、剰餘價值、搾取率、技術間の均衡はげしい週期的再調整であり、したがって労働の均衡は一時的に確立されるといい、マルクスにあっては「恐慌は理論でなく、コミユニズムへの爆發的連續的理論である」と解釋する。そして前述のシスモンディ、マルサス、ローダーディール、ロードベルトゥスの過少消費論は、過剰生産高の實現の問題にのみ關心を示したのたいしマルクスにあっては剰餘價值の發生と實現の條件とを區別するという形で把握されるのである。このようにネマーズのマルクス理解は一面的であり、皮相な解釋といわねばならない。だからネマーズ自身は、マルクスを過少消費論者の思想の範圍におき、一過少消費論者として類型化するには、餘りにも多くの點で逸脱しているかもしれないといわざるをえないので

ある。マルクスを過少消費論者としてうけとめていること自體反省しなければならぬであらう。

また五人の過少消費論者の説明の場合でも、シスモンディ——ロードベルトゥスの系譜をマルクスはいかに批判し、實現と恐慌の問題を論じたか、また他方でローダーディール——マルサスの過少消費説の系譜を批判的に解明すべきであらう。したがってネマーズは五人の過少消費論の政策的側面を指摘するだけで、それもそれぞれが、資本主義の矛盾意識をどのように獲得し、過少消費を展開したかという點は除かれており、また過少消費を景氣循環の一側面の理論として把握してゆく方法も不十分のまゝに終っている。もちろんネマーズは本書の初めにハバラーの言葉を引用して「過少消費論が危機的理論であつて、循環的理論でなかつた」ことを前面的におしだすつもりだったのか、その代り、ホブソン、フォスターなどの理論が、過少消費による過剰貯蓄を意味する點で前述の五人と異つていふことを強調したいようであるが、この點整理の不充分さを残しているといつてもよいであらう。もし過少消費説を整理するならばホブソン前後の顯著な學者をもとりあげて、要約的に整理できないものか。例えば、(一)「過少消費」を「過剰貯蓄」と同義語に解し、貯蓄に對し、消費の過少なことを好況破たんの原因とみなすホブソンの立場、(二)恐慌は貯蓄率の急増、すなわち消費財に對する需要の急減によつておこるのでなく、生産率の急増、消費財の急激な増加により誘發される立場、(三)資本財の供給がその需要に對し過剰となる立場、この型

は過剰投資説と一見通ずるが、かかる形での整理説明が他方で必要だったのでないだろうか。

第二の問題として、ネマーズがホブソンの經濟思想を四つの時期にわけてそれぞれの特徴を展開している點である。この點については前述したように磯部氏の詳細な紹介があるのでここでは省略し、問題とおもわれる點を指摘することにする。ネマーズによれば第一期(一八八九—一九〇年)はマンマリーとの共著「産業の生理學」での過少消費—過剰貯蓄という概念で展開した最初の過少消費論であり、第二期(一九〇一—一九〇二年)は過少消費にもとづく「所得分配の不等」の概念を政策面で積極的に展開する時期で、第三期(一九〇三—一九一八年)は、一方で準正當派の考えをみせ、他方で「所得分配の不等」以上に「貯蓄—消費比率」を重視する時期、第四期(一九一八—一九四〇年)は、過少消費論の政策面での適用復活の時期、すなわち分配の不等等は過剰貯蓄の結果による點を強調する考えを正面にかかげる時期である。ネマーズは、かくて過少消費の論理が各時期にどのように變化していったかを、三・四・五章で主著をめぐって具體的に展開してゆくのである。

ここで明瞭なことは、ネマーズの分析手法がホブソン經濟學を過少消費の側面から、いわば内側からのみ追求し、ホブソン「體系」を性格づけているということである。

この點第一期における「産業の生理學」の性格づけは問題ないとして、第二期の時期における主著「貧困の問題」(一九〇一年)「資本主義發達史論」(一九〇四年)「失業者問題」(一九〇九

六年)「社會改良家ジョン・ラスキン」(一九〇八年)「帝國主義論」(一九〇二年)の基礎は、いずれも過剰貯蓄、過少消費に起因する所得分配の不等等の論理によっていることは一應確かであろう。だが、これらの諸著作は經濟理論の單なる機械的適用として政策を取扱ったのではないであろう。むしろ理論と政策の有機的關連を主體的に取りあげたものであり、例えば「貧困問題」は過少消費にもとづく労働者階級の貧困狀態の實證であり、カールス・ブーアの「人民と労働の生活」を基礎にしてかいたものであり、この著作は「失業問題」と内的關連をもつものであり、むしろ政策的側面を主體的にとりあげた。その他の著書もそうである。したがって、政策と理論の統一的理解から第二期の性格規定をしなければ、ホブソンの經濟學の發展の側面が見失われるであろう。これをネマーズのいうように所得分配の概念が、貯蓄—消費比率の概念と獨立的に展開されたという形で過少消費論をとりあげることが説得的でないといわざるをえない。このことは第三、四期での規定にもいえることであろう。例えばネマーズ自身第三期で過少消費論を「産業制度論」(一九〇九年)の一部に限定し、ここでは第一期の「産業の生理學」での貯蓄—消費比率に力點がおかれるといわざるをえない點に表われている。

私としてはホブソンの經濟理論は「産業の生理學」「産業制度論」「富の科學」に系譜的にみられ、これらの主著を分析する過程で、規定できるのであり、他方で彼の經濟政策、歴史、思想を取上げて統一的に理解した方が、明瞭になると思う。

この點からホブソン著作「體系」を整理し、性格づけるべきではないだろうか。

これをネマーズのようにホブソンには政策的分析が強いから理論の整合性を缺いたという形でホブソンの最大の缺陥を指摘するのは承服できない。

第三として「帝國主義論」評價の問題を検討したい。ネマーズは本書第四章で、帝國主義の定義、「帝國主義論」形成とその前後の作品との關係にかんする簡単な説明、「帝國主義論」の意圖、過少消費論の適用、「帝國主義」の論理の展開、その資料分析の内容、帝國主義にかんするホブソンとシュンペーターの思想およびホブソンとマルクス主義的帝國主義論との簡単な比較を試み、要約している。

まずホブソン自身の検討から始めると、ホブソンは帝國主義の支配動機を輸出業者、金融業者による市場および有利な投資への要求、富裕な所有階級の利潤、配當、地代から生れる過剰蓄積の國外投資のために政治力を利用しようとする金融資本家、投資家の要求のなかに、同時にそれは國內の産業高度化のため安價な原料および食料の輸入を要求するところと結びつき、これらの要請からさらに代議政治の腐敗、墮落、軍國主義の擡頭の問題を追求する。ネマーズはとくに金融資本による過剰貯蓄にもとづく資本輸出の役割を強調する。そしてその基礎は所得分配の不平等に起因するのだという。すなわち「帝國主義論」はホブソン經濟學における過少消費論の一適用であり、それも「所得分配の不平等」の概念が前面にでている

ことをまず強調し、同時に貯蓄—消費比率の概念も重視する。

ネマーズはこの二つの概念における力點の作用を問題にし「帝國主義論」をホブソン經濟學「體系」の中に位置づけようとするのである。だが「帝國主義論」の場合、ホブソン經濟學「體系」の内側からのみ性格づけることは承認しがたい面を残すことになる。もちろん二つの概念はつねに表裏一體の關係であり、どちらに重點をおくかという分析はここでは餘り重要性をもたない。もちろんホブソン帝國主義論の經濟學的基盤は過少消費説に貫らぬかれていることは明瞭であり、したがって問題は、ホブソンの積極的意圖は、所得分配の不平等をなくし、不生産的剩餘を消滅させて均衡ある社會的再生産を維持することであつた。ここから改良主義の性格が明瞭になつてくるのであり、だからホブソンの剩餘の概念の分析が決定的に重要性をもつてくるのであり、この點をまずしっかりふまえて帝國主義論の全體的評價、さらにはマルクス主義的帝國主義論との決定的な差を論ずべきである。これをネマーズのように「帝國主義論」を過少消費論の一適用としての評價、さらに「帝國主義論」では政治學の分析の方がすぐれているとか、さらには、ホブソンとレーニンおよびシュンペーターの帝國主義觀を、それぞれ「改良的」「革命的」「隔世遺傳的第三者的」と羅列的に結論づけるだけでは「帝國主義論」の評價が不明瞭にならざるをえないか、或いは機械的な論じかただといわざるをえない。つきに本章で「帝國主義論」評價の第二の問題として取りあげるに値するものは、帝國主義にかんするホブソンの見解は十

年後に變つたという點である。このことをネマーズは二つの點から指摘する。一つはホブソンが「帝國主義論」でのべた歴史の經濟的歸結を過大に強調したことを反省するようになったこと。二つには資本輸出にもとづく金融業者の役割に對する反省、すなわち國際金融「業者」が平和の可能性ある道具として考えられるようになったことである。前者はホブソンが「經濟學上異端者の告白」(一九三八年)で、後者は「投資の經濟的解釋」(一九二一年)でのべている點にもとづいて、とくに國際投資の變化の指摘についてホブソン自身「おだやかな帝國主義は明確に平和的性格をもち、後進國間の秩序と發展の促進および國內の羨望を緩和するものであること」とのべた點、すなわち、ホブソンは「帝國主義論」(一九〇二年)で帝國主義の植民地に對する政治的經濟的支配を説いたこと、とくに金融業者の寄生的性格をのべたことを反省し、帝國主義が平和的性格をもつようになった。ここにホブソン帝國主義觀の變容があるという。ネマーズはとりわけ「政府借款と國家借款」を區別してホブソンの考え方の變化を指摘する。だが「帝國主義論」と「投資の經濟的解釋」の見解の變化を容易に理解できないとして、最後にホブソンにとつて「帝國主義」の重要性は過少消費の例證にあること、その限りでは兩立することを結論づけて、根本的問題は避ける結果になっている。にも拘らずホブソンの帝國主義觀が變化したことはウインズロー、靜田氏も指摘し、この點に關しわずかな論争があつたこと、例えば、磯部氏は國際投資における新しい傾向、帝國主義の性格の事實を指摘した

ことは帝國主義そのものの變化であつて、ホブソンの見解の變化でない(と解釋し)、前記の三人と異つた見解を示す。私自身この二つの解釋については他の機會に充分に詳論するつもりであるが、ただ兩者にいえることは、ホブソンが「帝國主義」で、國際獨占資本の基本的運動の論理を把握していないこと、したがって帝國主義論で國際投資の背後の資本の論理の分析が不充分であつたことをまず指摘しなかつたことであり、さらに「帝國主義論」をかけた當時の歴史的条件と環境と十年後のそれらの相違を正しくつかまえたうえで、ホブソンの經濟學の方法、ヴィジヨンの限界を指摘することが大切ではあるまいか、この點ネマーズおよびウインズローは手放しで論じているし、また磯部氏の指摘は、客體的條件の變化が、ホブソンのヴィジヨンをも變化させたという風にとられるおそれがある。問題はホブソンの帝國主義に對する全體的(政治・經濟的)分析方法が不充分であつたのではないだろうか。

その他問題にすべき點は多々あるがここでつけ加えたいのはネマーズによるホブソンの過少消費論批判であり、その直接の對象となつた文獻「産業の生理學」「失業の問題」「分配の經濟學」「帝國主義論」「産業制度論」「新國家における課税」「失業の經濟學」「合理化と失業」等である。さらにホブソンの統計資料の取扱ひ方批判である。これらの批判内容はここでは紙數の關係上問題にすることができない。だがその主點は、ホブソン經濟學における缺陷が、貨幣信用論の無視、利率調節節作用の輕視、資本理論の輕視、限界生産力主義の排除、セイ法則の

部分的認用にみられ、また景氣循環論についての一貫した主張がないことや、ホブソンの過少消費論と正統派の過剩投資論との比較、すなわち第一章でのべた過少消費論者の研究が缺けていたことをとく。最後に「剩餘」分析を課税規準に適用する論理の展開、合理化政策は勞働者の所得増加、失業解決にならないことを説明し、それは過少消費の視點からホブソンが反對したことをといている。

三

以上本書を三つの點に限定して貧しい論評をしたのであるが、本書がホブソンの經濟學體系を過少消費という赤き導きの糸で貫きとおしているのので、私の論評は半ば超越的批判になつてしまつたかもしれない。にも拘らずネマーズが、ホブソンの全著作「體系」における過少消費論の變化を、終始、克明に論證したことは、一應成功しているといつてもよいであらう。だがその場合にハミルトンや磯部氏もいうように若干の重複をまぬかれなかつたことは残念であるし、それはネマーズが過少消費という限定した視點からの分析だったからかもしれない。

また著者のホブソン批判にしても、著者自身の積極的な論旨の展開がみられないのは限らない弱點をもつといわなければならぬ。もちろんネマーズがホブソンの過少消費説の一貫した缺陷は、マネー・タームによる展開がないことを指摘し、その點に關する着實で精緻な批判研究がみられても、それではホブソン經濟學を近代經濟學の先驅者としてうけとめる姿勢の評價は

どのようなかといへば、この點不明瞭さを殘しているといへる。この點は、厚生經濟學者として、また社會經濟思想家としてのホブソン評價を無視した點にあるのかもしれない。この點今後、著者の研究に期待することにならう。

- (1) 拙稿「J・A・ホブソンに關する一試論」(「經濟系」31號)のホブソン研究の展望をみられた。なおここには、T. W. Hutchison, A Review of Economic Doctrines 1870~1929, 1953, pp. 118—129 を検討した。
- (2) E. M. Winslow, The Pattern of Imperialism, 1948, pp. 49—60.

- 靜田均「反帝國主義者ホブソン」(「經濟論叢」七四の三)
- (3) 磯部浩一「J・A・ホブソン研究——帝國主義論をめぐる一試論」(「一橋論叢」三七の五)に詳しい分析がある。

- (4) 拙稿「J・A・ホブソン經濟學の基盤について」(「一橋論叢」三七の六)参照。

(なおこの「書評」を執筆するにあたって、D・ハミルトン、J・ロビンソン、磯部氏の書評を、改めて讀む機会をえたことを編集部に感謝する次第です。)

(關東學院大學講師)